『ペンテコステの祝福』　使徒1:4-5

1:4 そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。
1:5 すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。

●序論
先ほど「変えられたソング」という賛美。
ただ知識が人を変える…という賛美ではありません。その続きが大切です。
「…愛されてる喜びを　どんな時だって　イエスはそばにいて　何度でも教えてくれる」
知識ではない、いわゆる人格的、霊的な経験を、見えないはずのイエスさまが今も、何度でも教えてくれる…、そういう体験の連続が、わたしたちクリスチャンの信仰生活です。
目には見えない神さまとの関係を、そんな風に経験する。それが実は、聖霊なる神さまがわたしたちの内にお働きになるからだとわかります。
使徒行伝の各所で語られる「聖霊のバプテスマ」という体験。それは使徒行伝が記す通り、劇的な体験であり、またその体験を経て、弟子たちは大きく変えられていった様子が描かれています。

この聖霊のバプテスマの体験は、神さまからの祝福です。
クリスチャンにとって、最も自然な姿は神の霊（聖霊）に満たされていることです。神の霊は清い霊、善良な霊、力強い霊です。クリスチャンならば、だれでも自分の生涯を神からあらゆる良いもので満たしたいと願うことでしょう。聖霊のバプテスマは、神があなたのために用意しておられる最も大きな賜物の一つです。

アンドリュー・マーレー「ペンテコステの祝福」という本
「教会にとって、どうしても必要なただひとつのもの、人々がどこにあっても、他の何ものにまさって、一致して心から求めなければならないものは、神の御霊（聖霊）に満たされるということです。」

●本論
Ⅰ．それは、キリストによる祝福です
聖書は、もちろん水によるバプテスマについて語ります。
それと同時に聖霊のバプテスマについても語っています。

これまでヨハネの福音書の１章から、ヨハネが”悔い改めのためにバプテスマ”として水でバプテスマを授けていたことを見ました。
その彼が、「わたしの後においでになる方」つまりキリストはこのような方であると示し、彼がキリストに違いを見ていました。

しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『…その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。 わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである」。（ヨハネ1:33）

小さく、弱いわたしたちには、神さまの祝福が必要です。
「弱さ」という意味で、十字架の後の弟子たちの弱さに共感できます。
彼等は、復活の主を見て喜びました。…しかしその経験だけでは十分ではありません。彼らも感じていたことでしょう。彼らは「失敗の経験者」でもあったからです。
だからイエスさまは言われました。

1:4　…彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。

イエスさまは「上よりの力」、聖霊のバプテスマを約束として語り、事実それをくださいました。それこそがペンテコステの体験です。
そしてこの聖霊のバプテスマを受けた弟子たちを始まりとして、キリストの十字架と復活を証言する教会の歩みがスタートしたのです。

Ⅱ．受け取るべき祝福です
キリストが愛される教会という表現があります。

エペソ5:25「キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように…」と。

わたしたちは、イエス・キリストに愛されています。
この愛されているわたしたちには、祝福とその目的があります。
わたしたちは、神さまを礼拝すること、お互いに励まし合い、慰め合い、愛し合うこと、それらも主の弟子たちの集い、この教会の大切な使命です。
そして、復活のキリストは、さらにその使命は明らかにされています。

ヨハネ20:21-22a イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「（だから）聖霊を受けよ。…

考えてみれば、この世界や時代の状況の混乱の度合いはどんどん増してきていて、揺れ動く価値観や評価、不安や疑心暗鬼がいっぱい満ちています。
そしてそんな遠くを見なくても、身近な人たちの目が怖い、言葉が怖い、という思いもわかります。

イエスさまはそんな私たちに、何も持たず出て行け…とは言われません。
イエスさまは「聖霊を受けよ」と言われました。またルカは、

「だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」と言うイエスさまの言葉も残しています。

あの弟子たちが生きた時代は、あのイエスさまさえも、さまざまな策略をもって十字架にかけた時代です。人々がこぞってイエスさまに向かい「十字架につけろ！」とゆがん

だ叫びを放った時代です。
そこで彼らは、聖霊を受けるために待ち望み祈り、そして変えられて、そのイエスさまを十字架につけた町で、その町の人々に向かってはっきり、イエス・キリストこそ神から遣わされた救い主だと宣言したのです。
だから、イスラエルの全家は、この事をしかと知っておくがよい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである」。（使徒2:36）
彼らの大胆な言葉と姿そのものも、聖霊の満たしなしに語れない。それと同時に、そこでその町の人々が次々と悔い改めて救われていったことは、まさに、人ではなく聖霊の働きでした。

長くなりました。そのすべてが、その弟子たちが聖霊のバプテスマを受けたことに始まっているのです。
五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、…
すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。（使徒2:1,4）

改めて、今の困難な時代に生きるわたしたちだからこそ、この祝福を必要としているのです。

Ⅲ．これは、あたりまえの祝福です。

「新約聖書はペンテコステ的な本です」
新約聖書は、明らかに「聖霊のバプテスマを受けた、聖霊に満たされた人々」によって記されたものだからである、ということです。
そして、このようなペンテコステ的体験を受けて記された聖書は、やはり聖霊の満たしを受けた人たちによって、はじめて完全に理解され、また正しく実行されていくのだという表現がされているのです。
さらに初代教会にとってこのペンテコステ体験は特別なものではなく、クリスチャン生活の基本的部分として、すべての者にあたり前に受け入れられていたのです。
アンドリュー・マーレーは次のように記しています。
「キリストの教会においては、毎日がペンテコステのときでなければなりません。人は、天の新鮮な空気でがなければ、健康を保てません。それと同じように、クリスチャンも教会も、この祝福がなければ、神の御心にかなった生活はできないのです。」

さて先ほどお読みしたエルサレムのペンテコステの出来事から20年ほど経て、エペソの教会でこう尋ねている記事があります。
「聖霊を受けたのか？」と。
この後、エペソの人たちはあらためてイエスによるバプテスマを受け、更に聖霊のバプテスマも受けました。

それは、信仰者の群れに無くてはならない祝福であることがわかります。
　しかし、最もわすれてはならないことは、これらの経験は、人間ではなく、神さまが与えてくださっている祝福の経験なのだということです。
だから、当たり前の経験として受け取ることができるのです。

〇結論として
一般にペンテコステの日は、約2000年前に聖霊が弟子たちに降ったことによって、教会が生み出さた「教会の誕生日」として理解され祝われます。
　確かに「教会の始まり」として覚えるべき大切な日です。

しかし、はっきり申し上げます。教会の誕生は、ペンテコステの日に注がれた聖霊の満たしの体験の結果生み出されたものです。
　　その教会は、聖霊の傾注の結果に生み出されたもので、その前に、まずこの聖霊の体験があったということです。

そしてそれは過去一回きりで終わりの出来事ではなく、聖書の体験と同じく、今日の教会を教会たらしめる経験でもあるのです。

　教会のアイデンティティは、聖霊の臨在と働き、そこにある使命と祝福にあります。そしてその祝福がわたしたちの日常生活に、違いを生み出します。神の祝福を経験する歩みと変えられていくのです。

だから申し上げます。イエスさまがあなたを遣わすと言われる時、必ずしもそれは特別な場所や国ではありません。むしろあなたの今置かれているところであなたは聖霊に満たされた者として歩むことができます。
　復活のイエスさまの言葉を聞いてください。
　　…「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。（ヨハネ20:21）